

「二十四孝」の張孝張礼説話について

——説話交替の問題——

坪井直子

〔抄録〕

中国では古来より親孝行の実践例を説くために、しばしば孝子説話を集成した教訓書が編纂されている。それらは、およそ唐代以前の孝子伝、宋代以降の二十四孝に大別することが出来、広く流布して周辺の諸国にもたらされた。日本でも室町時代以降、二十四孝は盛んに享受されたが、その普及の中心的役割を担ったのが、御伽草子『二十四孝』である。これは元の郭居敬が撰じた全相二十四孝詩選に基づくとされているが、必ずしもそうではなく、張孝張礼条の説話本文については千字文注にも拠っている。本稿では、御伽草子『二十四孝』張孝張礼条の説話本文が千字

文注に拠っていることを確認するとともに、その理由を考察し二十四孝詩選の説話本文が千字文注に近似するためと考えた。また、二十四孝詩選の張孝張礼説話は、趙孝趙礼説話の変化したものと考えられているが、二十四孝系統間においては、二十四孝詩選が、孝行録系二十四孝の趙孝趙礼説話から千字文注に由来する張礼説話へ、説話を替えた可能性があることを指摘した。

キーワード 二十四孝 二十四孝詩選 孝行録 千字文注

一

思想の根本に「孝」を持つ中国では古来より親孝行の実践例を説くために、しばしば孝子説話を集成した教訓書が編纂されている。それらは、およそ唐代以前の孝子伝、宋代以降の二十四孝に大別すること

が出来、広く流布して周辺の諸国にもたらされた。特に二十四孝は、印刷技術の普及もあろうが、象徴的な挿絵を伴うことが多く理解しやすいものであったこと、また二十四というまとまりの良い話数であったことが理由で、今日に至るまで享受され続けていると考えられる。

日本でも室町時代以降、二十四孝は盛んに享受されたが、その普及

の中心的役割を担ったのが、御伽草子『二十四孝』(以下、草子とする)である。これは各話の冒頭に五言四句の漢詩が配されており、元の郭居敬が撰した全相二十四孝詩選(以下、孝詩選とする)に基づく一種の翻訳文学とされている^①。しかし、実際に草子と孝詩選を比較してみると、詩の部分については両者は一致するが、説話本文については必ずしも一致せず、董永条や王哀条は蒙求注に、丁蘭条は劉向孝子伝(法苑珠林四十九所引)に拠ることが明らかにされている^②。

本稿で取り上げる張孝張礼条についても同様である。この説話は、張孝と張礼という兄弟の話で、賊に捕らえられ食べられることになった弟を、自分の方が肥っているからという理由をつけて兄が身替わりを願い出るという話である。草子の説話本文は、孝詩選だけでなく北魏李暹の千字文「恭惟鞠養」注にも基づくのだが(高橋健太郎氏のご教示による)、なぜ草子は千字文注を用いたのだろうか。その理由を考えてみたい。

また孝詩選も含めたこの説話の問題として、かつて金文京氏が「この話の主人公は、趙孝趙礼であって、張孝張礼ではない」と指摘されている^③。二十四孝は、孝行録系、二十四孝詩選系、日記故事系の三系統に分けることが出来るが、この説話は兄弟愛を説いたものであるために、最も新しい系統の日記故事系には記されず、また古い系統である孝行録系では、趙孝趙礼の誤伝である趙孝宗趙孝礼となっていて、なぜ草子や孝詩選が孝子の名前を「張孝張礼」とするのかも疑問なのである。本稿ではこの二つの問題について考察してゆく。

まず、草子の張孝張礼条が孝詩選だけでなく千字文注にも拠っている

ことを確認するが、その前に確認に用いる千字文注について簡単に記しておく。千字文は識字の初等教科書として中国で作成されたもので、中国はもちろんのこと朝鮮や日本においても広く用いられてきた。異なった一千個の文字が四語の韻文でつづられており、梁の武帝の命で周興嗣が作成したと伝えられる。その千字文には幾つか注釈書があるが、注目されるのは北魏李暹のもので、小川環樹氏によれば李暹注は古注と新注に分かれる。そのうち古注が唐宋の故事や説話を考える上で重要である。古注は李暹の注を基本に他の注釈が加わった三種類即ち、弘安十(一二八七)年書写の奥書を存する本(弘安本)、敦煌写残卷(S五四七一・敦煌本)、纂図附音増広古注千字文(纂図本)がある。弘安本は故事や説話の引用は少ないが、纂図本は李暹注を増広改竄^④して、多数の故事や説話が俗語を交えた文体で記されており興味深い。敦煌本は纂図本と同じ注釈であることもあれば、そうでないこともある。張孝張礼説話は敦煌本と纂図本に載るが、草子に關わるのは纂図本であろう。したがって、次に草子、孝詩選、千字文「恭惟鞠養」注を上げ比較検討する^⑤。

・草子

偶値^ニ緑林児^一 代^レ烹^ニ瘦肥^一

人皆有^ニ兄弟^一 張氏古今稀

張孝張礼は兄弟也。世間飢饉の時に、八十余の母を養へり。木の実を拾に行たれば、一人のたえ疲れたる者来て、張礼を殺てくらはんと云り。張礼言やうは、「我老たる母をもてり。今日はいまだ食事を参らせざりつる程に、少の暇を給れ。母に食物を参らせ

て、頼而参らん。若此約束を違へば、家に來て、一族迄を殺給へ」と云て帰る。母に食事を進て、約束の如くに、彼者の所へ到けり。兄の張孝是を聞て、又跡より行て、盜にいへる様は、「我は張礼より肥たる程に、食するによるべし。我を殺て、張礼を扶よ」と云り。又張礼は、「我初よりの約束也」とて、死を争ければ、彼無道成者も、兄弟の孝義を感じて、友に死を免、か様の兄弟古今希也とて、米二石塩一駄と与へたる。是を取りて帰り、いよく孝道をなせるとなり

・孝詩選

偶値「綠林兒」 代烹云「瘦肥」

人皆有「兄弟」 張氏古今稀

張孝張礼家貧、兄弟二人、礼養母拾菜於路、遇賊將烹食之、礼云、乞回家、供母早食、却來就死、孝聞自詣賊曰、礼瘦不如孝肥、願代弟命、礼曰、礼本許殺、勿殺吾兄、賊見二人孝義、俱捨之

・千字文「恭惟鞠養」注

昔有張礼、遇飢饉之年、孤養老母在堂、年八十餘、礼拾菓帰、於路遇賊、欲殺礼食之、礼叩頭云、家中侍養老母、朝來未得食、乞命少時、帰家与母作羹、却來就死、礼若不來、任就家斬為百段、賊遂放去、礼至家、懽悦与母作食供誂、母怪問曰、今天下飢荒、汝何懽咲、礼曰、兄在田拾菓、婦遇賊欲殺兒、為母未食、乞命暫帰、苟或憂愁、母必不食、是以強咲阿娘母住、兄今去就死、母曰、汝既脱賊帰去、何更自

就死、礼曰兄若不去、賊來斬家娘、恐驚阿娘、即非為孝子、其弟隔門聞之、蜜自走去賊所、謂賊曰、向者欲帰作羹者是兄、兄孝養老母、年老辛苦羸瘦、弟肥肉多、願代兄命、兄復至賊所、謂賊曰、礼本許殺、何得殺弟、賊見二人慈順、皆不忍殺、更与礼米二石塩一斤、婦侍養老母、以金孝敬之道也
傍線部——や傍線部——は、孝詩選にはなく千字文注に拠つてい
ると考えられる部分である。特に數量を示す傍線部——は、草子と
千字文注にしか確認できなかった部分で、草子が塩の單位を「駄」、
千字文注が「斤」とすることを除けば両者は一致する。徳田和夫氏は
「十五世紀初頭から訳出され始め、「二十四孝」に落ち着くまで、相
当の曲折があつたものと思われる。おそらく五山僧を中心に註や抄と
呼ばれるものかなり作られたであろう」と推定されている。千字文
注は五山僧によく用いられた注釈書であるので、張孝張礼条の説話本
文が千字文注に拠つたとしても不思議ではないだろう。

もつとも、波線部~~~~は異なる。草子では、兄張孝が弟張礼の身
替わりを賊に願ひ、弟張礼もまた賊との約束通り自分を殺すことを望
むのに対し、千字文注では、名前を記されない弟（「其弟」）が兄張礼
の身替わりを賊に願ひ、兄張礼も賊との約束通り自分を殺すことを望
むのである。つまり、賊に捕らえられるのは両者とも張礼だが、張礼
は草子では弟であるのに対し、千字文注では兄になっているのである。
その点孝詩選では、草子の人物構成と同じで、張礼は弟であり、兄の
張孝が捕らえられた弟の身替わりを願ひ出ることになっている。おそ
らく草子は孝詩選の人物構成を用いつつ、千字文注によつて内容を増

補したのである。しかし、なぜ草子は千字文注に拠ったのだろうか。

もともと孝詩選と千字文注の文章には近似する部分がある。

特に孝詩選の

願代弟命、礼曰、礼本許殺、勿殺吾兄、賊見二人孝義

と、千字文注の

願代兄命、兄復至賊所、謂賊曰、礼本許殺、何得殺弟、賊見二人

慈順

は、兄と弟の違いはあるもののよく似ている。草子が千字文注に拠ったのも、このことが関係しているのではないだろうか。そして、さらに言うならば、孝詩選も千字文注と関係しているように思われる。次にそのことを考えてみたい。

二

孝詩選の典拠について、大島建彦氏は「張孝・張礼のことは『温公家範』などに記されているが、『全相二十四孝詩選』は『純正蒙求』上の「長平詣賊」によったものとみられる」と述べられた。⁽⁷⁾ 温公家範七には、次のような後漢書をもとにする、趙孝趙礼の説話が載せられている。

王莽末、天下乱、人相食。沛国趙孝弟礼、為餓賊所得。孝聞之、即自縛詣賊曰、礼久餓羸瘦、不_レ如_二孝肥_一。餓賊大驚、並放_レ之、謂曰、且可_レ帰、更持_二米糲_一来。孝求_レ不_レ能得、復往報_レ賊、願就_レ烹。衆異_レ之、遂不_レ害。郷党服_二其義_一（四庫全書本）

また純正蒙求上の「長平詣賊」は次のような文章で、やはり趙孝趙礼

の説話となっている。

東漢趙孝字長平、時大乱人相食。孝有_二兄名礼_一、為_二賊所_レ獲。孝聞_レ之、自縛詣_レ賊曰、礼久餓羸瘦、不_レ如_二己肥飽_一。賊大驚、二人皆免_レ害（日本文化元二八〇四）年刊本

確かにこれらの説話の大筋は、孝詩選の張孝張礼説話と同じであり、もともになった可能性がないとは言えない。だが孝詩選が純正蒙求に拠ったとするには、純正蒙求が兄の名前を礼、弟のそれを孝としているのに対し、孝詩選はその逆にしていること、また何より「趙」と「張」という姓氏の違いが問題となろう。

大島氏は張孝張礼と趙孝趙礼を何の疑いもなく同一視されたと考えられ、おそらくその見方は、膨大な二十四孝の資料を蒐集、整理された徳田進氏の見方を踏襲されたものと思われる。⁽⁸⁾ 孝詩選の張孝張礼説話は、東觀漢記や後漢書の趙孝伝と話柄が同じであり、姓氏は異なるけれども名が一致するので、考証もなく張孝張礼と趙孝趙礼を同一視されたのも無理はないだろう。しかし、このことに疑問を投げかけられたのが金文京氏である。氏は、名前の変化について「その真の原因は、少なくとも筆者などには、結局のところ趙と張を同音によって誤ったとしか思えないのである。しかし、そうすると、趙と張が同音となるのは、近世日本漢字音のみという困った問題が生じる……趙孝趙礼から張孝張礼への変化は日本で起きたかもしれない。すると冒頭に掲げた明の嘉靖刊本を抄写したはずの『二十四孝詩選』が張孝張礼となっているのはどういう訳であろうか」と述べ、古抄本の調査が必要であると留保しながらも、変化が日本で起きた可能性を提示された。⁽⁹⁾

しかし、金氏のご論考の発表後、橋本草子氏が行った孝詩選諸本の調査によって、明洪武年間の建安版が存在することが判明しており、それには張孝張礼とあるので、変化は日本ではなく中国で既に起こっていたことになる。橋本氏はまた、後述する日記故事に関連して、千字文注にも張礼の説話があることを述べられており、千字文のような識字の教科書も「孝子説話の来源として視野にいれるべき」とされている。^⑩

金氏が提示された趙孝趙礼から張孝張礼への変化の問題を解決することは容易ではない。だが、二十四孝系統間での変化即ち、孝行録系の趙孝宗趙孝礼から二十四詩選系の張孝張礼へは、二十四孝詩選系が孝行録系の説話を引き継がずに、千字文注収録の説話へと入れ替えたためであると考ええることは出来ないだろうか。このことはまた、孝詩選が純正蒙求を典拠とするという徳田氏や大島氏の見解を考え直すことにも繋がる。

張孝張礼説話を載せる文献には、千字文注、敦煌本千字本注、日記故事諸本、孝詩選、二十四孝についての日本の抄物があるが少ない。これらの中で最も古い文献は千字文注である。その張孝張礼説話の文章は先に紹介した通りで、孝詩選のように弟の張礼ではなく、兄の張礼が賊に捕らえられる話となっている。このような構成の話は、千字文注に限ったことではなく、日記故事諸本にもみられる。

日記故事は元の虞韶が編纂した童蒙のための教訓書で、よく利用されたために幾度か編集し直されて数種類の刊本が伝わるが、それらの中で古い形を遺しているとみられる嘉靖二十一（一五四二）年刊本巻

二愛親類に収録された張礼説話を次にあげる。^⑪
乞命帰養

（後漢）張礼^{沛國}人、遇^二飢饉^一_{谷不熟曰飢、藥不熟曰饉}、孤^{无父}養^二老母^一、拾菜、帰遇^レ賊欲^レ殺食^レ之、礼叩頭云、家中老母、朝未^レ得^レ食、乞命少時、帰家供訖、却来就^レ死、賊遂放去、礼弟隔^レ牆聞^レ之、密自走^二賊所^一、謂^レ賊曰、向者欲^レ帰^レ作^レ羹者是吾兄也。兄孝養^{声去}、辛苦羸瘦、弟肥肉多、願代^二兄命^一、礼復至^二賊所^一曰、礼本許^レ殺、何得^レ殺^レ弟、賊感^二二人慈孝^一、皆不^レ殺

後世の刊本では若干記事が省略されているが、兄張礼が賊に捕らえられることには変わりがないし、よくよく日記故事諸本と千字文注の文章を比べてみると、両者は近似しており、日記故事諸本は千字文注の張礼譚を収録しているようである。日記故事が千字文注の張礼説話を収録しているならば、日記故事と繋がり深い孝詩選もまた千字文注の張礼説話を参照している可能性は高い。そのことは孝詩選と千字文注に近似の文章があることから裏付けられる。また千字文注や嘉靖二十一年刊日記故事では、張礼の名しか記さないが、同じく古形である嘉靖四十五（一五六六）年朝鮮刊本の挿絵には「張孝」「張礼」の傍題があるので、千字文注の張礼説話は、張礼一人の説話ではなく、張礼張孝兄弟の説話として認識されていたと思われる。孝詩選は、孝行録系の趙孝宗趙孝礼説話を、千字文注の張礼説話へと入れ替えたのではないだろうか。

二十四孝の系統間の入れ替えは、二十四孝詩選系から日記故事系へは二話しか入れ替わらないのに対し、孝行録系から二十四孝詩選系へ

は、二十四話のうち実に八話もが入れ替わる。それらを上げれば次のようになる。

・孝行録系

劉殷 王武子 劉明達 鮑山 曹娥 元覺
魯義姑 伯瑜

・二十四孝詩選系

漢文帝 唐夫人 吳猛 王哀 黃香 庾黔婁
黃山谷 朱寿昌

孝詩選は、宋代の孝子の説話を取り入れようとしたことの他に、儒教に不都合であったり、正体不明となつてしまつた孝子達の説話を排除しようとしたらしい。孝行録系の趙孝宗趙孝礼は、趙孝趙礼が誤つて伝えられたもので、正体が分かりにくくなつてゐるために入れ替えられたのだから。

また、その他の理由として、趙孝趙礼説話には親孝行の要素が少ないことが考えられる。孝行録「趙宗替瘦」には若干親孝行の要素があるが(「弟孝養老母且身瘦」、後漢書等の趙孝伝にはなく、孝行録系趙孝宗趙孝礼説話のものになつたと推定される孝子伝にもない¹²)。次に孝行録「趙宗替瘦」と、孝行録系のものになつたらしい類林雜説卷一孝友篇第四所収の孝子伝逸文を上げる。

・孝行録「趙宗替瘦」

趙孝宗弟孝礼、為賊所劫欲烹之、孝宗詣賊曰、弟孝養老母且身瘦、不如己肥、請代烹、其言哀切、賊曰此孝子也、皆釈之

・孝子伝逸文

趙孝宗 長平人也。弟礼為餓賊捉、將欲食之。宗聞之走、謂賊曰、礼瘦、不如孝宗肥。請代弟死。賊相謂曰、此義士也。賊遂共釈之。漢明帝時、為長樂尉。出孝子伝

趙孝宗趙孝礼説話は、孝子伝逸文に「此義士也」とあるように、親孝行の話ではなく兄弟愛或いは孝義を説いたものである。漢代では義士は孝子の範疇であつたが、南宋、元の頃になると孝行の範囲が狭まつて外れるようになったらしく、二十四孝詩選系では兄弟愛を説く張孝張礼説話と田真田慶田広説話がかかるうじて収録されるが、日記故事系ではこれら二話は親孝行を説く江革説話と仲由説話に入れ替えられてしまふ。趙孝(趙孝宗)を義士とすることは一般的な理解であつたように、孝子伝逸文だけでなく、西夏本の類林三行果品所収の趙孝宗伝には「義」とあり、錦繡万花谷前集十六所収の趙孝宗伝にも「義士」とある。それらと比較すると、孝詩選には「礼養母拾菜於路、遇賊將烹食之、礼云、乞回家、供母早食、却来就死」とあつて親孝行の記述が多いので、兄弟愛だけを説く孝行録系の趙孝宗趙孝礼説話から親孝行をも説く千字文注の張礼説話へと、説話を入れ替へてしまつたのだと考えられる。

ただ千字文注の張礼説話では兄が張礼であるのに対し、孝詩選では兄が張孝となつていて、兄と弟の名前が反対になつてゐる。この理由は定かではないが、孝詩選編者が、孝行録系の説話の影響を受けて、兄と弟を替へて千字文注の張礼説話を利用したか、編者本人が誤解したのではないだろうか。同様に孝行録の趙孝礼が親孝行であつた記述

も、千字文注の張礼説話の影響を受けた可能性があるだろう。

三

ところで、千字文注の張礼説話は、趙孝趙礼説話を基にするように思われる。しかし、金氏が悩まれたように趙孝趙礼から張孝張礼への変化には、音韻の問題があるし、細部の記述もかなり異なっていて、両者の関係を明確にすることは難しい。今は後漢書三十九列伝二十九趙孝伝と、前掲した千字文注の張礼説話とを比較するのみに留め、関係を明らかにすることは今後の課題としたい。次に後漢書の記述と、千字文注の記述を再掲し比較してみる。

・後漢書

a 趙孝字長平、沛国蘄人也。父普、王莽時為田禾將軍、任孝為郎。每告婦、常白衣步擔。嘗從長安還、欲止鄆亭。亭長先時間孝當過、以有長者客、掃洒待之。孝既至、不自名、長不肯內、因問曰、聞田禾將軍子當從長安來、何時至乎。孝曰、尋到矣。於是遂去。b 及天下乱、人相食。孝弟礼為餓賊所得、孝聞之、即自縛詣賊曰、礼久餓羸瘦、不如孝肥飽。賊大驚、並放之。謂曰、可且歸、更持米糲來。孝求不能得、復往報賊、願就亨。衆異之、遂不害。鄉党服其義。州郡辟召、進退必以礼。孝廉、不応。c 永平中、辟太尉府。顯宗素聞其行、詔拜諫議大夫。遷侍中、又遷長樂衛尉。復徵弟礼為御史中丞。礼亦恭謙行己、類於孝。帝嘉其兄弟篤行、欲寵異之、詔礼十日一就衛尉府、太官送供具、令共相对尽。

歆。數年、礼卒。帝令孝從官屬送喪歸葬。後歲余、復以衛尉賜告婦、卒于家。孝無子、拜礼兩子為郎。

・千字文注

昔有張礼、遇飢饉之年、孤養老母在堂、年八十余、礼拾菓歸、於路遇賊、欲殺礼食之、礼叩頭云、家中侍養老母、朝來未得食、乞命少時、歸家与母作羹、却來就死、礼若不來、任就家斬為百段、賊遂放去、礼至家、懽悅与母作食供飧、母怪問曰、今天下飢荒、汝何懽笑、礼曰、兒在田拾菓、歸遇賊欲殺兒、為母未食、乞命暫歸、苟或憂愁、母必不食、是以強笑阿娘母住、兒今去就死、母曰、汝既脱賊歸去、何更自就死、礼曰兒若不去、賊來斬家娛、恐驚阿娘、即非為孝子、其弟隔門聞之、蜜自走去賊所、謂賊曰、向者欲歸作羹者是兄、兄孝養老母、年老辛苦羸瘦、弟肥肉多、願代兄命、兄復至賊所、謂賊曰、礼本許殺、何得殺弟、賊見二人慈順、皆不忍殺、更与礼米二石塩一斤、婦侍養老母、以金孝敬之道也。後漢書は、a 孝（兄）が郎であった時、故郷へ帰るときは常に無位無冠を示す白服を着て荷物を担ぎ歩いていたために、貴人であるとは思われず、亭長に宿泊を拒まれた話、b 天下が乱れている時、礼（弟）が餓賊に捕らえられたので、その身替わりを孝が願ひ出る、餓賊は驚き米を持ってきたならば許してやろうと兄弟を放つが、孝は米を得ることが出来ず餓賊に煮られることを望む話で、趙孝趙礼のもとになった話、c 官吏登用を含むその後の兄弟の略歴という三つの話柄からなる。ちなみに東觀漢記十五は後漢書とほぼ同様であるが、c の略歴の

前に別の話即ち、食料が乏しい時に、貴重な穀物を入手した孝夫妻は、それを弟礼夫妻に譲って自分達は野菜だけの粗末な食事をとろうとし、それに気づいた弟夫婦ともに野菜だけの食事をとったという兄弟友愛の話が加わる。¹³つまり、後漢書や東觀漢記は兄趙孝の一代伝記となっているのである。それに対し、千字文注では、後漢書のbの話に、傍線部——の兄張礼が独りで母親を養っており、賊に捕らわれた時に、母親に食事をさせるため暫しの命乞いをしたという孝行話に加わっている、兄張礼の孝子説話といった体裁である。

bの話柄の部分だけでも、詳しくみてゆくと両者はかなり異なる。後漢書では、捕らえられるのは弟で、弟が痩せている理由は餓えからである（「礼久餓羸瘦」）。しかし、千字文注では、捕らえられるのは兄で、兄が痩せている理由は、孝行であり、年老いた母を養っているからとなっている（「兄孝養老母、年老辛苦羸瘦」）。兄が老母を養っていることは、説話冒頭にも記述があり、兄が独りで養っていたことが記されている（「孤養老母在堂」）。その他に、後漢書にはない記述で、兄礼は、自分の身替わりを願った弟ではなく、本の通りに自分を殺してほしいと賊に願う部分がある（「兄復至賊所、謂賊曰、礼本許殺、何得殺弟」）。こうしてみると、両者に共通するのは、礼という名前の人物が賊に捕らえられ、その身替わりを礼の兄弟が願う出るという点だけである。

もともと千字文注の張礼説話は、複数の人物の伝を合わせたような構成になっている。母親に食事をさせるための命乞いは、後漢書三十九列伝二十九劉平伝の次の箇所との類似性が指摘されているし、¹⁵

更始時、天下乱、平弟仲為賊所殺、其後賊復忽然至、平扶持其母奔走逃難、仲遣復女始一歳、平抱仲女而棄其子、母欲還取之、平不聽曰、力不能兩活、仲不可以絶類、遂去不顧、与母俱匿野沢中。平朝出求食、逢餓賊、将亨之、平叩頭曰、今且為老母求菜、老母待曠為命、願得先帰、食母、畢、還就死。因涕泣。賊見其至誠、哀而遣之。平還、既食母訖、因白曰、属与賊期、義不可欺。遂還詣賊。衆皆大驚、相謂曰、常聞烈士、乃今見之。子去矣、吾不忍食子。於是得全

賊が兄弟の慈順に感動して、兄弟を放免するのみならず、米二石塩一斤を贈ったという話は、次に上げる日本伝存の六朝時代の孝子伝の亜流とみられる逸名孝子伝（陽明文庫蔵、京都大学附属図書館船橋文庫蔵）に収録される王琳王季兄弟（王巨尉）の説話の末尾「賊更牛蹄一双、以贈之也」と通じるものがある。

王巨尉者汝南人也。有兄弟二人。兄年十二、弟年八歳。父母終没、哭泣過礼。聞者悲傷。弟行採薪。忽逢赤眉賊。縛欲食之。兄憂其不還。入山覓之、正見賊縛將殺食。兄即自縛、往賊前曰、我肥弟瘦。請以肥身易瘦身。賊則嗟之、而放兄弟、皆得免之。賊更牛蹄一双、以贈之也（陽明文庫蔵本）

孝子説話には過剰なまでの孝行を記すものがあるが、千字文注もその一つに数えて良いだろう。おそらくは、後漢書の趙孝伝、劉平伝、逸名孝子伝の王巨尉伝の影響を受けて作られていったものではないだろうか。

孝子説話では、孝子は異なるが同じ孝行の話柄である場合が往々にしてある。例えば、迫り来る隣家の火事から親の棺を身を挺して守ろうとする話は、蔡順伝にもあるし（後漢書三十九列伝二十九等）、古初伝（後漢書二十九列伝十九等）にもある。孝行説話は模範として踏襲されるべきものであるから、違う人物の伝記に同じ孝行話が付されることはよくある事例であるし、孝行の種類にも限りがあるので、自ずとそうなるのだろう。

兄弟の一人が賊に捕らわれ、もう一人がその身替わりを願ひ出るという話柄も、趙孝趙礼（張孝張礼）説話に限ったことではない。他に王琳王季兄弟（東觀漢記十五、後漢書三十九列伝二十九等）、倪萌とその兄（東觀漢記十五、論衡齊世篇等）の説話があつて、一種の話型が出来上がつていたと考えられる。但し、これらの説話の流布状況は時代によって異なる。漢代では後漢書に趙孝伝に続けて王琳伝が記され、六朝時代では、日本伝存の逸名孝子伝やネルソン・アトキンズ蔵北魏孝子伝図石棺に王琳王季説話が描かれている。孝子伝に収録された王琳王季説話は広く流布しようだが、その後趙孝趙礼説話に圧されて衰退したらしい。唐代の孝子伝の実態はよく分かっていないが、類林雜説所収の孝子伝逸文からすれば、趙孝趙礼説話が孝子伝に収録されて流布しようだ。そして、いつの時点で趙孝を趙孝宗と誤つたのか定かではないが、名前を誤つた孝子伝から、北宋時代に主流となる孝行録系二十四孝へと引き継がれ、南宋時代以降成立の二十四孝詩選系では、千字文注所収の張孝張礼説話へと交替するわけである¹⁶⁾。

先に隣家の失火から親の棺を守る説話を例として上げたが、さらに

もう一つ加えれば、生前雷を怖がつていた親のために雷が鳴るたび墓を守りにゆく説話は、六朝時代の孝子伝図では蔡順の説話として描かれるが、孝行録系にはその話はなく、二十四孝詩選系では王裒の説話となっている。これらの説話の入れ替わりは、細部に違いはあつても大筋に変化はなく、結果的に孝子名だけが交替しているだけである。そこには孝という思想の伝統性や規制力の強さを見ることができるとに思う。

〔注〕

- (1) 市古貞次氏校注『御伽草子』（日本古典文学大系、岩波書店、昭和33年）解説
- (2) 三浦俊介氏「『二十四孝』―董永譚を中心に―」（『国文学解釈と鑑賞』61・5、平成8年5月）、川崎博氏「嵯峨本『二十四孝』の挿絵作者について（上）」（『国華』一二三八、平成10年12月）参照
- (3) 金文京氏「『孝行録』の明達売り」について―「二十四孝」の問題点―」（『汲古』15、平成1年6月）
- (4) 小川環樹、木田章義氏注解『注解千字文』（岩波書店、昭和59年）解説、山崎誠氏「本邦旧伝注千字文攷」（『中世学問史の基底と展開』（和泉書院、平成5年）I参照。
- (5) 草子は注(1)前掲書、千字文注は算図附音増広古注千字文（元和三・一六二七）年刊の寛永二・一六二五）年模刻版、孝詩選は竜谷大学蔵『全相二十四孝詩選』乙本（禿氏祐祥氏解説『二十四孝詩選』〈全国書房、昭和21年〉）による。参考までに敦煌本千字文注を次に上げる（黒田彰、後藤昭雄、東野治之、三木雅博氏『上野本注千字文注解』（和泉書院、昭和63年）付載、敦煌本『注千字文』に拠る）。
- (二) 字分空き 離在家、竭力以養老母、時有羗賊、在田捉之礼叩頭曰、戎有老母在家、我為取菜供養、君若殺我、老母交關朝食、願君放我、作羹与母食訖、我即

- 自来就_レ死、終不_レ失_レ信、賊遂放還_レ家、礼入_レ門、歡悅怡咲、作_レ羹与_レ母食訖、母問_レ礼曰、於今飢饉、使_レ子辛苦、何有_レ歡樂、忽然怡咲、礼曰、兄向者在_レ田取_レ菜逢_レ賊、欲_レ殺_レ兄、々為_レ阿嬢未_レ朝食、乞命少時、若欲_レ愁憂、恐_レ嬢不_レ樂、是以_レ歡悅見、今就_レ死、好住、母曰、既免_レ賊手、何乃自去、礼曰、兄若不_レ去、賊就_レ家取_レ兄、賊若来、驚_レ恐阿嬢、即非_レ孝子、其弟滴_レ檻間_レ兄此言、密自走出、而至_レ賊所、冒_レ曰、向來仁者、是我之兄、君既須_レ肉、我肥肉多、我兄孝養羸弱、宍少、今代_レ我兄_レ取_レ死、願君殺_レ我、莫_レ殺_レ我兄、須臾之間、張礼走到、本許_レ殺_レ我、何為_レ殺_レ第、賊見_レ張礼兄第、如此、悉皆流_レ淚、遂赦_レ二人之命、使_レ送還、而乃遺_レ米一斗、令_レ与_レ老母、鞠養之道、其由如此也
- (6) 徳田和夫氏「お伽草子「二十四孝」誕生前夜」『和漢比較文学叢書』6 (汲古書院、昭和62年、「二十四孝 誕生前夜」として『お伽草子研究』△三弥井書店、昭和63年) 二篇四章に再録
- (7) 大島建彦氏校注『御伽草子集』(日本古典文学全集、小学館、昭和49年)『二十四孝』「張孝張礼」頭注
- (8) 徳田進氏「孝子説話集の研究 二十四孝を中心に」(井上書房、昭和38年) 157頁
- (9) 注(3)前掲論文
- (10) 橋本草子氏「全相二十四孝詩選」と郭居敬「二十四孝図研究」ノートその一」(『人文論叢』43、平成7年1月)、「日記故事」の版本について―二十四孝図研究ノートその三―(『人文論叢』46、平成10年1月)
- (11) 『中国古代版画叢刊』2 (上海古籍出版社、昭和63年)による。なお、日記故事諸本の中には、張礼説話のほかに「代弟赴賊」として、趙孝趙礼説話を収録するものがある。詳しくは注(10)橋本氏前掲論文「日記故事」の版本について 参照。
- (12) 黒田彰先生は、孝子伝逸文の「趙孝宗 長平人也」が、「趙孝字長平」の「字」を「宗」と誤読したことから生じた記述であることを指摘している(『孝子伝の研究』へ佛教大学鷹陵文化叢書5、思文閣

出版、平成13年) I二3。

(13) 西夏本類林の趙孝宗伝は、史金波、黄振華、聶鴻音氏『類林研究』(寧夏人民出版社、平成5年) 63頁参照。また錦繡万花谷前集十六趙孝宗伝(「争死」)は次に上げる(『北京図書館古籍珍本叢刊』所収宋刻本影印による)。

後漢時、趙孝宗 弟孝礼被_レ賊捉_レ去、欲_レ殺_レ而食_レ之。孝宗聞_レ之、走見_レ賊曰、孝礼不_レ如_レ孝宗肥。願代_レ弟死。賊相謂曰、此義士也。遂並放_レ之_伝。

(14) 参考までに東観漢記の趙孝伝で後漢書にはない記述を次に上げる(吳樹平氏校注『東観漢記校注』による)。

趙孝、字長平、建武初天下新定、穀食尚少、孝得_レ穀、炊將_レ熟、令_レ弟礼夫妻_レ使_レ出、比還、孝夫妻共加_レ蔬菜、礼夫妻来帰、告言已食、輒独飯_レ之。積久、礼心怪疑、後掩伺_レ見_レ之、亦不_レ肯_レ復出、遂共疏食、兄弟怡怡、郷里帰徳

(15) 注(4)前掲書「恭惟鞠養」注。

(16) 趙孝趙礼説話を中心とする孝子伝や二十四孝関係史料における兄弟の名前と、賊に捕らえられた人物の一覧

文献史料	兄の名前	弟の名前	餓賊に捕らえられた人物	備考
東観漢記趙孝伝	趙孝	趙礼	趙礼	
後漢書趙孝伝	趙孝	趙礼	趙礼	
後漢書王琳伝	王琳	王季	王季	父母の墓守
陽明文庫、船橋文庫蔵逸名孝子伝	王巨尉(王琳)	なし	(弟)	父母の死に哭泣過礼
西夏本類林	趙孝宗	趙孝礼	趙孝礼	
類林雜説所収孝子伝	趙孝宗	趙孝礼	趙孝礼	
敦煌本千字文注	礼	なし	礼	母を養う
千字文注(纂図本)	張礼	なし	張礼	母を養う
温公家範	趙孝	趙礼	趙礼	

純正蒙求	趙礼	趙孝	趙礼	
錦繡万花谷	趙孝宗	趙孝礼	趙孝礼	
孝行録	趙孝宗	趙孝礼	趙孝礼	母を養う
二十四孝詩選	張孝	張礼	張礼	母を養う
日記故事	張礼	(張孝)	張礼	母を養う
お伽草子	張孝	張礼	張礼	母を養う

(つばい なおこ

文学研究科国文学専攻博士後期課程)

(指導教員…黒田 彰 教授)

二〇二一年九月三十日受理